



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	北海道キリスト教会における講演から : クープランのオルガン・ミサ曲写本とその史料的意味について
Author(s)	松前, 紀男
Citation	基督教学, 31, 37-45
Issue Date	1996-07-22
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/46569
Type	journal article
File Information	31_37-45.pdf



北海道キリスト教会における講演から

クープランのオルガン・ミサ曲写本
とその史料の意味について

松前 紀男（東海大学）

諸言

ミサの典礼の中で、オルガンが声の代りを奏で、その式典を盛りたてるオルガン・ミサ *Messe d'orgue* の形式は、十六・七世紀頃の教会所属のオルガニストたちにとって貴重な表現メディアであった。このようにオルガン演奏を取り込んだ形のミサでは、合唱の代りにオルガンが偶数番目のフレーズを奏で、ここではグレゴリオ聖歌の旋律を素材としたフーガや間奏曲風小品が用いられていた。このような形式のオルガン・ミサの歴史は、十六世

紀にまで溯り、一五三二年にピエール・アテニャン *Pierre Attaignant* が出版した七つのオルガン作品の中に、二つのオルガン・ミサ曲が含まれているのが、現存する最古のものとされている。しかしこの初期の頃のオルガン・ミサ曲の形式は、十七世紀になって大きく変化し、今迄の単純なグレゴリオ聖歌を基としたものから、オルガニストの伎倆を示すものに発展した。このころからオルガン・ミサは、楽器の音色を表現素材とした技法を取り入れ、加えて宮廷歌謡や舞踏曲、オペラ風の旋律、それにフランス序曲、リュートから受け継がれた鍵盤楽器の技法と装飾音などが、クラヴサン技法のオルガン曲への転用という形で用いられた。

クープランのオルガン・ミサ曲は、《教区民のためのミサ *Messe à l'usage ordinaire des paroisses*》《修道院のためのミサ *Messe propre pour les convents*》からなっており、それぞれが目的の異なる典礼に用いられたことから、様式上も対象的な性格を有している。前者は祝祭日のための典礼に用いられたもので、やや派手な感動的音调が曲全体を包んでいる。これに対して後者は、修道士

及び修道女のために修道院の典礼で用いられたことから、全体が内省的な落ち着きを持っている。

問題はこの作品が、フランスのオルガン音楽を代表する優れた出来ばえを示しているといった評価とともに、その一方で、いくつかの重要な歴史的諸疑問を我われに示してくれていることである。それは次の三点に集約できる。

- (1) この作品が、パリのサン＝ジェルヴェSaint-Gervais 寺院のオルガニストの席に着いたフランソア・クープラン（大クープランとも呼ぶ）François Couperin le grand の成熟した晩年の作ではなく、ごく若い頃の処女作（初発表）である点である。
- (2) またこの作品が、長い間彼の伯父である同姓同名のフランソア（二世）の作であると信じられていたのは、何故であろうか。

- (3) そしてこの作品の原本ともいわれるものが国立図書館から消え失せ、最も信頼に価する写本が、南フランスの田舎町カルパントラスCarpentrasの図書館で発見されている事実を、どう解釋するか……

という問題である。

I 処女作が持つ意味

大クープランがサン＝ジェルヴェ寺院のオルガニストに就任した頃、この寺院の界限は以前のような賑いを失い、寂れかけていた。

市庁舎の裏手にあるこの寺院は、かつては市の中心に存在しており、多くの著名な銀行家や収税吏、それに金持たちの住居が建ち並んでいて、パリで最も豊かな地域の中心にあつたのである。しかし大クープランがオルガニストの地位に就く頃になると、金持たちはパレ＝ロワイヤルの近くのサン＝トノレSaint-Honoré地区に移り住んでしまい、十六世紀頃に寺院の周りに館（やかた）を持っていた貴族たちまでも、新開地に次々と建設される新しいルイ十四世時代好みの館やかたに移っていった。このように教会の財政を支えていた連中や格式あるミサをあげる貴族たちが居なくなると、この寺院の周辺は、古ぼけた旧市街と化してしまったのである。

一六五三年以後、代々この寺院のオルガニストを勤め

ていたクープラン家は、この寺院の典札の質を高め、その魅力で人びとを引きつける重要な役割を担っていた。

一六七九年に、大クープランの父であるシャルル Charis は、妻と十二歳の一人息子のフランソア(大クープラン)を残してこの世を去ってしまった。シャルルが亡くなった時、教会の財産管理委員たちと残された妻は、この名器といわれる教会のオルガンを弾く者を誰にすべきか、大いに迷ったのであろう。それも伯父に同姓のフランソア(一世)がおり、彼は当時オルガンとクラヴサンの名手であり教師としても優れていたからである。順当にゆけばこの伯父が代々受け継いできたサン・ジェルヴェ寺院のオルガニストを継ぐのが当然であった。だが彼は好酒家で、私生活に問題があり、後継者としてはふさわしくなかった。⁽¹⁾ そうなると音楽の才にたけた幼い大クープランが、その地位を継ぐのに最もふさわしい人物ということになる。だが彼はまだ十二歳になったばかりで、一家の知人であったジャック・トムラン Jacques Thomelin の指導でオルガンの修行を積んでいる最中であつた。結局のところ、一九六七年に父シャルルの後を

継ぐことになったのはド・ラランド De Lalande であり、その就任に際して、彼が教会との間に交わした公正証書には次のようなことが書かれている。

「シャルルの息子であるフランソア・クープランが十八歳になって、自らサン・ジェルヴェの教会でオルガニストの資格で勤務することができるとまで、この席を確保しておいて欲しいという望みをかなえさせるために、教会の理事たちは、バユール通りに住んでいるオルガニストの、ミシエル・ド・ラランドを選んで雇い入れた⁽²⁾」というのである。

ド・ラランドは、サン・ジェルヴェ寺院のオルガンを痛めないように大切に扱い、責任をもってこの名器を管理することと、教会の祝祭時にも演奏する義務を負うことと、教会のオルガニストのための予算四〇〇リーブルのうち三〇〇リーブルを支払うので、それ以上は絶対に要求しないこと……などが約束させられている。

大クープランがこのオルガン・ミサ曲を作曲するにあたって、サン・ジェルヴェのオルガニストとして認められ、しかもこの寺院の典札をより魅力的とするために、

ド・ラランドが代行を勤めている期間、彼は準備と学習を積むことができたのである。

事実、大クープランがオルガニストとなって最初に出版したオルガン・ミサ曲は、オルガン曲の長い歴史の中で練りあげられた伝統的技法を基礎とし、それに新しい時代にふさわしい新鮮な表情を織り込みながら、この教会にふさわしい成就した内容を伴ったものとなっている。この曲は教会内の雰囲気を感じ、フランスのオルガン音楽の伝統をくまなく研究し尽くしたすえ書きあげられた、習作的性格を備えている。³⁾ 彼は恐らく、多くの若い音楽家たちと同様、技法の習得のために優れた作品を参考にする方法に習って、師であるトムランや父シャルルから見せてもらった多くの作品を研究し、そこから諸々のオルガン音楽の技法を学びとったといえよう。従って彼のこの作品は、ネーデルランドの流れをくむ輝かしいフランス・オルガン楽派の伝統の集大成と見ることができ、同時に、当時ヴェネチアで出版されていた、イタリアのオルガン作品の影響をもそこに見出すことができるのである。大クープランはこの二つのオルガン・

ミサ曲を引っさげて、堂々とサン・ジェルヴェのオルガニストとしてデビューを飾った。

ところがこの作品をめぐって歴史家たちは、長い間誤りを犯すこととなった。というのも、この作品が処女作としてはあまりにも優れていることと共に、この作品を世に出すために作成した複数の写本の表紙に印刷されたヘクリリーの殿 Sear de Croilly という称号をめぐって、この尊大な称号を十代の青年に与えられる筈が無いと決め込んでしまったためである。

II 誤りから得られる歴史の意味

クープラン家研究の第一人者といわれたシャルル・ブーヴェ Charles Bouvet は、彼の著作『クープラン家の人びと Les Couperin』⁴⁾でも、同じ誤りを犯すこととなった。彼は著書の中で二作品を、伯父のフランソア(二世)のものとして紹介している。このブーヴェの判断は、彼が参考とした『オルガン大作曲家選集 Archives des maîtres de l'orgue』⁵⁾のアントレ・ピロ André Pirro の記述をもととしているのだが、ベルギーの音楽学者フェ

ティイス Francis J.Fetis が編纂した『音楽人名辞典 Biographie universelle des musiciens』にも、これと同様の誤った記述が見られる。そしてフランスの歴史家でオルガニストとしても著名であったダンジュール Louis Félix Danjou も、一八四六年の『宗教音楽雑誌 Revue de la Musique religieuse』で、同様の誤りを犯しているのである。

加えてパリとヴェルサイユに残されているいくつかの写本の表紙にも、これと同様の誤りが書き込まれていることを見ても、大クープランが精根込めて入念にしあげたオルガン・ミサが、しばらくの間、伯父のものとしてしまっていたことは歴史的事実である。

つまりパリ国立図書館の写本のひとつには、明確に、「一六三二年にシヨームIIアンIIブリに生れ、サンIIジェルヴェのオルガニストを、一六七九年から一六九八年まで勤め、一七〇八年にこの世を去った——フランソア・クープラン・ル・グランの伯父」と書かれている。またもうひとつのものにも、「大クープランの伯父」と記されている。

このような誤りはヘクルイリーの殿の称号が誰のものであるか……ということと直接関連している。これを「解く鍵は、クープラン家の祖先たちの地、シヨームIIアンIIブリ Chaumes-en-Brieとその周辺の地域にある。

パリの南東に広がる田園地帯のブリ地方は豊かな農村地帯で、森と島が連なり、昔からここに土地を持ち小作人に島を作らせながら、パリで貴族風の優雅な暮らしをする人びとの故郷でもあった。そのブリ地方のシヨームの町は、クープラン家の出身地でもあるのだが、そこから約三キロメートル離れたところにボーヴォアール Beauvoir という村がある。ここのシャトーに残されている古文書の中に、シヨームの教会でオルガンを弾いていたシャルル・クープラン（一世）（祖父で、父もシャルルという名）が、クルイリー Crouilly という名のついた二エーカーの土地を所有していた記録が残されている。この土地はシャルル（一世）が母から相続したもので、クープラン家にとっては重要な意味を持ち、大クープランもしばしばこの祖先ゆかりの地を訪れている。父シャルルも教度証書類にこの地の名を冠した称号ヘクルイリーの

殿》を使っている。この土地の名は十四世紀の古地図上にも見られ、ボーヴォアールのシャトーの前に広がる農地にクリマ・デュ・グラン・クルイリー *Climat du Grand Crully* と書き入れられている。つまりこのヘクルイリーの殿の称号は、クープラン家の正統な後継者の意味を含む重要な称号といえるのである。

この事実から類推すれば、大クープランのオルガン・ミサに書き込まれた称号は、サン・ジェルヴェのオルガニストの地位を継ぐにふさわしい人物という意味で使われた称号である。大クープランがこの称号を用いたのはたゞ一回限りで、つまりこのオルガン・ミサの表紙のみであり、これは何か重要な継承すべき事柄が認められる時に使用された称号と解釈できる。例えば父シャルルが母マリー・II グラン Marie Guérin と結婚する際にサインした結婚誓約書にも、父が自分の名の後に同様の称号を書き込んでいるのを見ても、この称号の持つ意味の重みが理解できる。このようなことから、この称号を伯父のフランソア（一世）が使用することが許される筈はなく、クープラン家出身のオルガニストの就任を記念し

て、この作品でもってサン・ジェルヴェ寺院の伝統を守り続け、オルガニストとしての地位の継承を宣言する象徴の意味を含んでいるといえるのである。

III 失われた写本の行方

前述した様に、このオルガン・ミサ曲の最も信頼に値する写本は、パリの国立図書館に残されていた筈であるが、現在は失われてしまっている。ところが一九二九年になって、『音楽学雑誌 *Revue de Musicologie*』はこの写本と全く同一と思われるものが、南フランスの地方都市カルパントラ Carpentras にあるアンギャンベルティエヌ図書館 *Bibliothèque d'Inguimbert* に、MS. 1038 として保管されていると報じた。⁽⁷⁾ この図書館は日本に於いても、伊達政宗の遣欧使節（慶長使節）支倉右衛門常長関係の史料が近年になって発見されたことで知られる図書館である。この支倉関係の史料は、MS. 1794 に整理された手書きの記録文書で、支倉がスペインからローマに向かう途上、嵐にあって滞在したサン・トロローペ *Saint-Tropez* での数日間の記録である。

しかし音楽学にとつてのこの図書館の重要性は、他のいくつかのコレクションとともに、ボナヴァンチュール・ローラン Jean Bonaventure Laurens が寄贈したコレクションの存在である。ローランは、当地の聖歌隊長ルイ・ローラン Louis Laurens の息子で、父と同様音楽を始め多才な能力にたけ、数多くの音楽家、つまりメンデルスゾーンやブラームス、シューマン、ドイツのオルガンリストであるリンクなどと交友関係を持ち、自らも作品を残し、当時の音楽界でかなりの影響力を持った人物であった。彼はクープランのクラヴサン曲の近代における出版を最初に手がけた人物としても知られている。

この図書館のローランが寄贈したコレクションの中の MS. 1038 は、クープランのオルガン・ミサの原本といわれる写本で、横長六段綴りの牛皮表紙をもつ写本である。その最初のタイトル頁（印刷された表紙）の左頁には、一八三八年十一月十八日の日付をもつ書き込みが見られ、これはダンジュールがローランに親愛の情を込めて贈った献呈文である。ダンジュールが何故この重要な写本をローランに贈ったか、そのうえこの写本は国立図書館

から失われた写本と同一と見られる数々の類似点が認められるのである。そしてこの写本には同時にダンジュールの蔵書標示が *ex libris f. Danjou* と書き込まれているのである。

しかしこの写本が国立図書館から消え失せたものと同じのものであるとする決定的な証拠は無いが、少なくともこの極めて貴重な写本をダンジュールが保管しており、これを何等かの理由でローランに献呈したことは確かである。何れにせよこの写本の重要性は、使用された紙の透しからも類推することができる。この透しは献呈文の頁から見られ、最初つり鐘状にからんだ植物の蔦を思わせるデザインが見られる。その後三種の透しが順にくり返し現れ、これ等はヴェルサイユの公立図書館 *Bibliothèque Municipale de Versailles* の MS. 4 に収められているオルガン・ミサの写本と類似している。これらは明らかに、クープランと同時代にパリで製造された紙を使用して書かれたことになる。

しかし、これは現存する写本の中で最も美しく、訂正も全く見当たらないもので（ヴェルサイユ写本には訂

正ヶ所が見られる)、頁の下のところどころには、CとCを組み合わせた組文字が捺印されている。これは明らかに、表紙に印刷されたクープラン・ド・クルイリーの略である。この種の捺印は、当時作曲家自身が、最も信頼すべき写本に捺印したものである。この習慣は十七・八世紀を通じて、偽版を防ぐ意味で、表紙だけを印刷し楽譜が写本の形態を取る場合に用いられていた。

一方このクープランのオルガン・ミサ曲の写本の印刷された表紙には、「サン・ジェルヴェ寺院のオルガニスト」という肩書きと共に、「サン・ジェルヴェ寺院の大扉近くの住居」という表現で作曲者の住所も示されている。当時この寺院の裏手にあるオルガニストを住まわせる宿舎には、大クープランの家族以外の者は住んでいなかった。これ等が、この曲の作者が誰か……:について、決定的な情報を我われに示してくれる材料となる。

結

ひとつの写本は、そこに書き込まれている情報以外に、関連する様々な事実を我われに伝えてくれるものであ

る。近年の情報化社会が、ネットワークを通して書き込まれた情報の詳細を遠隔の人びとに速やかに伝えてはくれているが、写本はそれを上まわる情報量を、手に取って調べることにより我われに与えてくれるものである。

歴史家たちが、単純にネットワークによって交換される情報だけに頼るわけにはゆかないのも、存在する写本が持つ隠された情報とそこから広がる様々な意味が、我われの歴史研究にとって如何に大切かを熟知しているからである。『事物は手で触れて調査すべし』とする歴史研究上のフィールドワーク(図書館も含む)の重要性は、世の中が情報の交換に於て益々便利さを加えてゆく今日、逆にその重みを増してきていると見るべきである。

このクープランのオルガン・ミサ曲の写本ひとつを取ってみても、このことは明らかであり、近年の情報ネットワークの発達により、歴史研究上の史料の存在が明らかにされればされる程、歴史研究の基本としてのフィールドワーク——この場合は図書館での入念な手作業の調査の重要性が、益々要請されて来ると言えるのである。

(註)

- (1) Tilon du Tillet; Le Parnasse françois, Paris, P.403.
- (2) Archives Nationales, LL748, f°58.
- (3) 松前紀男・クーパーマンの家族と芸術 音楽之友社
昭和6年 P.110.
- (4) Charles Bouvet; Les Couperin, 1919, Paris, P.36.
- (5) Felix A.Guilman; Archives des Matres des l'orgue,
Paris et Mayence, 1898-1914.
- (6) Archives Nationales, Y201, f°173.
- (7) André Tessier; Une exemplaire original des pièces d'
orgue de Couperin, Revue de Musicologie, 1929, P.109.